

キジハタの栽培漁業を開始

今年度から栽培漁業センターでは漁業者の皆様からの要望を受け、新しい栽培漁業対象種として本格的にキジハタの栽培漁業に取り組んでいくこととなりました。

そこで、今回はキジハタを含めたハタの仲間について紹介したいと思います。

ハタという名前はハタ科魚類を代表する「マハタ」の斑模様が白黒に染め抜いた旗のように見えることから、江戸時代に「旗代魚(はたしろうお)」と呼ばれていたのが語源のようで、昔から親しまれていた魚だということがわかります。

ハタ科魚類は日本では100以上もの種が確認されています(世界では400種以上!)。温暖な海に生息する種類が多く、日本では南に行くほど種類が多くなる傾向があります(北海道:1種、沖縄県:53種)。

大きさも3cmのチビハナダイから2mを超えるタマカイなどと幅広く、その多くの種が美味で知られ、漁業における有用な魚種として認められているグループです。このことから、世界中から日本へ輸入されていますが、南の海に生息する種類にはシガテラ毒を有するものもあり注意が必要です(キジハタは問題ありません)。

今回栽培漁業に取り組むことになったキジハタは、その名のとおり鳥のキジのような色模様をしています。鳥取では「アコウ(石茂魚)」、「アカミズ(赤水)」と呼ばれることが多く、こちらのほうがなじみ深いかもしれません。漁獲のほとんどが一本釣りという本種は、流通量が少なく高級魚で知られており、1kgあたりの値段が5,000円以上になることもあります。消費者にとっては高くてなかなか手が出ませんが、その分、味は非常に良く、白身で淡泊な肉は刺身や煮付け、鍋料理などに向いているほか、中国などでは清蒸石斑魚などの蒸し料理として珍重され、海外でも高級魚として扱われているようです。

キジハタの生態についてはまだまだ解っていないことが多いのですが、ある程度の小集団で生息しており、群れの中でも小型の魚はメスで、成長するとオスに性転換するという変わった習性をもっているようです。また飼育下では逆にオスがメスになることもあるらしく、性転換については諸説あるようです。

キジハタは種苗生産が難しいことで知られており、その大きな原因として挙げられるのが、生まれてくるサイズが小さいことです。卵から孵化した時点ではわずか1.8mmしかありません。このサイズでは当然極めて小さい餌しか食べられない上、衝撃などに非常に弱く、エアレーションの泡が当たただけで死んでしまうと言われているほどです。それだけでも飼育は大変ですが、病気にも非常に弱く、飼育者泣かせの魚と言えます。ただし、ある程度育った後は一転して強い魚となり、飼育も容易になります。

その有用性の高さから多くの地域で放流に取り組まれている魚でもあり、近年急速に育てる技術が向上しています。鳥取県でもいち早く自県産の種苗の放流が可能となるように、取り組んでいきたいと思っています。



図3 種苗生産が期待されるキジハタ